九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Prevalence and Risk Factors for Myopic Retinopathy in a Japanese Population The Hisayama Study

田原, 朋子

https://doi.org/10.15017/1654750

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

KYUSHU UNIVERSITY

（別紙様式２）

氏　　名	田原　朋子
論　文　名	Prevalence and Risk Factors for Myopic Retinopathy in a Japanese Population The Hisayama Study
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　鴨打　正浩 副　査　　九州大学　　教授　　萩原　明人 副　査　　九州大学　　教授　　飛松　省三

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

【目的】日本人一般住民における近視性網膜症の有病率と危険因子を調査した。

【対象と方法】2005年に久山町健診を受診し、本研究の解析に必要なデータが得られた40歳以上の住民1,892人を対象に、全身評価と眼科検査を行った。近視性網膜症はびまん性萎縮病変、限局性萎縮病変、lacquer cracks、黄斑部萎縮のいずれかの所見を認めるものと定義し、眼底写真で評価した。

【結果】近視性網膜症は33人に認め、有病率は1.7%(女性2.2%、男性1.2%)であった。この有病率は年齢が高くなるとともに有意に増加した。所見別にみると、びまん性萎縮病変、限局性萎縮病変、lacquer cracks、黄斑部萎縮の有病率はそれぞれ1.7%、0.4%、0.2%、0.4%であった。多変量解析によって近視性網膜症と有意な関連を認めた因子は、高齢(1歳上昇あたりのオッズ比1.12、95%信頼区間[CI]1.07-1.18)、女性(オッズ比3.29、95%CI109-9.92)、眼軸長が長いこと(1mm増加あたりのオッズ比4.20、95%C13.03-5.83)であった。

【結論】日本人一般住民における近視性網膜症の有病率は1.7%であった。高齢、女性、眼軸長が長いことが近視性網膜症の有意な危険因子であった。

以上の結果は、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられ、本論文について論文の研究目的、方法、結果、意義などについて説明を求め、各調査委員より専門的観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、ほぼ満足すべき回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。